NHK交響楽団の名誉音楽監督のポストにあるシャルル・デュトワが、同響を率いて今夏のザルツブルク音楽祭に初登場。細川俊夫「ソプラノとオーケストラのための《嘆き》」、ベルリオーズ《幻想交響曲》ほかでザルツブルク音楽祭デビューを飾った翌朝、ホテルに氏を訪ねた。

取材・文＝中 東生
Text=Shinobu Naka

Interview with Charles Dutoit in Salzburg

NHK交響楽団ザルツブルク音楽祭デビューの立役者

シャルル・デュトワ

「細川さんの作品は、入念に準備したよ」

――昨晩は素晴らしいコンサートでした。マエストロのご感想をお聞かせ下さい。

デュトワ（以下、D） そうだね、成功したと言えるね。細川さんの新曲でも表現すべきことが実現できたし、聴衆に受け入れられた印象を受けたよ。

――前半では、日本人の心をも打つ『日本』が音楽によって描き出されていて、N響を始め、私も含めた日本人すべてがマエストロに加護されているように感じました。なぜこれほどまで『日本』を表現できるのですか。

D そりゃあ、1970年から毎年のように日本に行っているのだから。日本が大好きだしね。武満さんとは仲良くしていたし。それ以前も顔見知りではあったが、仲良くなったのは1981年10月7日夜の11時頃だったかな。その日は僕の誕生日でね、なんと翌日は武満さんの誕生日だっていうから、もうすぐ日付が変わるその瞬間に一緒に誕生祝いをしたのさ。解り合える友人だった。昨日のコンサートに武満夫人と娘の眞樹さんも来てくれてね、喜んでくれていたよ。

細川さんもよく知っているよ。前に僕がN響のための作品を委嘱したこともあるくらいだから。今回の新曲も細部に至るまで、どのように演奏すべきかが細やかに書かれているから、その指示通りに演奏しただけさ。最初は手書きの譜面をもらってね、そこに小さくたくさんのことが書いてあった。だから印刷譜が届いてから再度研究したり、入念に準備したよ。

――打って変わって後半では非常に透明感のある音で、フレーズが膨らんでもすぐ萎んでしまう儚く切ないベルリオーズの世界でした。

D そう、あれがフランスの音、ベルリオーズの音さ。ただそれを実現させただけだよ。《幻想交響曲》は、ベートーヴェンの死から3年後の作品なんだよ。その後もブラームスの最初の交響曲まで50年近く待たなきゃならない。そういう時代に作られたこの交響曲を、ドイツの後期ロマン派風に演奏したものが多過ぎる。ベルリオーズの音楽を忠実に再現すれば、昨日のようになるのさ。優雅で色彩が豊かなんだ。N響はそれを実現できたね。ラトルが来てくれていただろう？ 彼は尊敬できる音楽家で、よく作曲家特有の音について議論するんだ。

――今回のプログラムはどのようなお考えで組まれたのですか？

D 細川さんの作品はザルツブルクからの委嘱で、《ノヴェンバー・ステップス》は、武満作品がもっと頻繁に演奏されるべきだと思うから選んだのだよ。以前にもベルリン芸術週間でN響と披露したし、（1993年に《ノスタルジア》2003年に《セレモニアル》）今回もよい機会だったと思うよ。

――マエストロにとって「ザルツブルク音楽祭」は特別な音楽祭でしょうか？

D ザルツブルクはモーツァルトの生地だし、重要な音楽祭だよ。でも、僕は1年に200回ものコンサートをこなしているんだ。毎回同じようにベストを尽くすだけだよ。

N響はもっと世界に名を知らしめる必要がある

――今回のツアーで世界の人々に、N響のどのようなところをアピールしたいと思いましたか？

D N響はもっと世界に名を知らしめる必要があると思うね。それとは別にツアーの良いところはね、楽団員と話す機会があることなんだよ。東京でのコンサートでは、みんな家に帰らなければならないだろ？ でもツアー中はみんな時間があるから、いっぱい一緒にいられる。それが楽しいね。

――そんなN響と、名誉音楽監督として今後どのような関係を続けていきたいですか？

D 僕たちはよい友達なんだ。こんな友情関係がこれからもずっと続いていったらいいなと思うよ。新しい首席指揮者が決まったんだろ？ 誰だっけ？ それによってどう変わるかは分からないけれど、今のところ毎年1回は共演しているんだから。えっ、少ないって？ そうかあ、そりゃあ、もっと来てくれって言われたら、その時は行くよ。

――常任指揮者になられた頃のN響と現在のN響で一番変わったところはどこですか？

D あれは1996年だったね。その間に楽団員もどんどん若い人に替わっていって、管なんかほとんどそれ以降に入っ

インタヴューは8月27日、ザルツブルク市内のホテルで行われた ©Wolfgang Lienbacher

ベルリオーズの音楽を忠実に再現すれば、昨日のようになるのさ。優雅で色彩が豊かなんだ。N響はそれを実現できたね。

た団員だからね、当然変わっていくさ。一番変わったのはレパートリーじゃないかな。今までのドイツ音楽のレパートリーに、フランス音楽やオペラなど新しい色が加わって、それらが要求する新しい音色を持つようになった。もともと素晴らしいオケだからね、手持ちの色が増えたと言えるかな。

――最後にマエストロの今後のヴィジョンをお聞かせ下さい。

D 実はね、今後はもっとオペラを振りたいんだ。今までもメトロポリタンやコヴェントガーデン、ロサンゼルスなどで振って来たし、コロン劇場では《ニーベルングの指環》もやったけれど、4晩目がストと重なり実現していないのが心残りだ。ムーティもよい友達でね、ローマ歌劇場に度々呼んでくれるのだけれど、まだ実現していない。僕が大切にしている作曲家モーツァルトのオペラを振りたいねえ。彼の作品は180以上も振ってきたけれど、どうも、今までどの劇場もモーツァルトのオペラを僕に提案してくれないんだ。ローマ歌劇場でモーツァルトのオペラを指揮するのがヴィジョンだよ。

●

「じゃあ東京で会おう！」と手を振り、閉まったままの車窓から投げキッスをしながらサイモン・ラトルに会いに出掛けていったデュトワは、これからもっと変貌する予感を漂わせていた。